国際対がん連合 Unio Internationalis Contra Cancrum
International Union Against Cancer
第11号
2010年1月

UICC日本委員会ニュースレター

事務局：〒135-8550　東京都江東区有明3-8-31　癌研究所 Tel:03-3570-0542 Fax:03-3570-0546

UICC世界

UICCに大規模な改革の動き

事務局長の交替

UICCでは2009年5月にExecutive DirectorのIsabel Mortaraが突然の辞意を表明し、後任を探していたが9月末にCary Adamsを任命した（今後はCEOとなる）。Adams氏は46歳の英国人で、Business Administrationを専門とし、2000年からLloyds TSB GroupでInternational BankingのChief Operating Officerなどを務めて来た人物である。

新事務局長の大規模の改革案

着任後9週間にして、彼は世界の対がん戦略とUICCの詳細な現状分析をなしとげ、意欲的な改革案を12月2日の理事会に提出、承認を得た。彼の現状分析と改革案の骨子は以下のようなものである。

1. UICCの世界対がん宣言（World Cancer Declaration WCD）は2020年までの戦略目標でもあるが、このような長期戦略を持つ組織は稀である。しかし、現在のUICCの予算規模と実行体制では、この目標は達成できない。

2. WCDを達成するためには、支援体制（Supporters, S）、資金・資源（Resource, R）、影響力（Influence, I）が必要なので、UICCならではの"Crown Jewels" *（王冠についている宝石の意から、企業の優良資産という意味も）活動を位置付け、S, R, Iを増やすために活用する。

3. 従来の世界対がんキャンペーン（World Cancer Campaign）はWCDとの関連がなかった反省から、WCDの11のターゲット**から4～6の優先度の高い事項を選び出し、真に国際的でWCDに直結し、ジュネーブ本部のユニークな立地条件に立脚したものに絞って展開する。そのための資金調達はWCD基金を設立し、理事会の同意を得た割合で種々の目的のために使用する。

4. その他、グローバルな問題に関心をもつビジネス界、芸能界、宗教界などの重要人物、がん生存者などをWCD Ambassadorと任命し、ソフトな資金調達活動のために活躍してもらう。

6. World Cancer Leadership Summitを毎年ジュネーブで開催し（世界会議とは別に）、WCDの進捗評

目次

UICC世界
1. UICCに大規模な改革の動き 1
2. 2010の世界がん会議は深圳 2
3. 深圳の世界がん会議に参加しよう！ 3
4. UICC日本委員会が世界がん会議への開発途上国からの参加者を支援 3
5. Denoix教授とTMN分類 ....青木国雄 3

UICCアジア
6. アジア太平洋がん会議をおえて ....赤座英之 5
7. UICC-AROの会開催さる 6
8. がんをグローバルなアジェンダに ....河原 ノリエ 7

UICC日本
9. 2009年度UICC日本委員会総会行われる 7
10. 日本癌学会のUICC国際シンポジウム "子宮頸がんの征圧をめざして" 8
11. 2010世界対がんデーシンポジウムに参加を 9
12. 「国際貢献と一次予防重視の視点が必要」北川委員長ががん征圧全国大会で講演 ....荒田茂夫 10

価と次のステップの計画を、WCD Ambassadorやアドボケートなどを糾合して行う

7. 最終的には、WCDが対象にしている120の国々で、国家的がん征圧計画がつくられ、がん対策がG8の議題になり、国際的機関でグローバルな政策が定められ、主要な国々がその政策を採用するようにする

*** Crown Jewels**

1. World Cancer Declaration（世界対がん宣言）
2. World Cancer Campaign（世界対がんキャンペーン）
3. World Cancer Declaration Fund（世界対がん宣言基金）
4. World Cancer Leadership Summit（世界対がんリーダーシップサミット）
5. World Cancer Day（世界対がんデー）World Cancer Survivor Achievement Awards（世界がん生存者功労賞）
6. World Cancer Declaration Ambassadors（世界対がん宣言大使）
7. World Cancer Congress（世界がん会議）

**** 世界対がん宣言の11の目標**

1. 全ての国々でにおいてがん征圧計画が効果的に行き渡ることを確実にする。
2. がんの頻度とがんによる損失の大きさの測定体制を格段に向上させる。
3. タバコとアルコールの消費量および肥満者を激減させる。
4. HPVとHBVワクチンの集団接種を実施させる。
5. 有害ながんに関する妄説や誤解を一掃する。
6. より多くのがんが検診と早期発見で診断されるようにする。
7. 診断，治療、社会復帰訓練、緩和ケアなどが受け易い体制をつくる。
8. 効果的な苦痛制御の手段が世界のどこでも入手できるようにする。
9, がんコントロールの専門家を訓練する機会を増加させる。
10. がん専門の保健医療従事者の流出を減少させる。
11. がんの生存率を大幅に改善する。

予告

2010の世界がん会議は深圳

北京で開催する事になっていた2010年の第21回世界がん会議が、急遽深圳で開催されることに変更された。開催日は8月18-21日で変わらない。この変更は、会場に予定されていた北京の新建築物があまりに巨大で、UICC世界がん会議に合わないことと、会場費が非常に高額であることが判明した為で、深圳での開催は中国側からの代案である。深圳にはモダンで適当なサイズの国際会議場がある。UICCと中国の委員会は、現在多くの人々の提案を受けつつ、プログラムの編成作業を行っている。UICC日本委員会では、アジアの近隣の中国で開催されるこの世界がん会議に日本からも多数の方々が参加されるように呼びかけている。

演題登録は2009年11月30日～2010年1月31日。会議に関する情報はwww.worldcancer-congress.org.で得られるが、以下にその一部を紹介する。

"Preventing the preventable - Treating the treatable - Systems to make it happen"

What the World Cancer Congress offers

This unique Congress will review in broad terms the very latest knowledge about cancer causes, prevention, treatment and care. It will examine how to optimize plans to control cancer now and influence a nation's or a region's cancer agenda as well as assess the role of cancer organizations in implementing the cancer agenda. This event will be a valuable opportunity to discuss and review knowledge and skills and to reassess policies and programmes with other experts from around the world. The different sessions will be an opportunity to review the progress made, go in depth on current issues and hear from the experts on future challenges and opportunities. The scientific programme will be developed along the following tracks:

Cancer prevention

Tobacco control

Cancer treatment

Supportive care

A comprehensive description of the tracks can be found here

Target 1: Ensure effective delivery systems in all countries

Target 2: Significantly improve measurement of cancer burden

Target 3: Decrease tobacco, alcohol consumption & obesity

Target 4: Universal coverage of HPV/HBV vaccine

Target 5: Dispel damaging myths & misconceptions

Target 6: More cancers diagnosed via screening & early detection

Target 7: Improve access to diagnosis, treatment, rehab & palliative care

Target 8: Universal availability of effective pain control

Target 9: mprove training opportunities for cancer control professionals

Target 10: Reduce emigration of healthcare workers specialized in cancer

Target 11: Major improvements in global cancer survival rates

Registration fees (Euros)

	Early rate before 15 April 2010	Regular rate before 1 July 2010	On site rate as of 17 August 2010
UICC members	€300	€450	€795
Non members	€620	€795	€850
One day registration	€330	€370	€390
Accompanying person	€140	€160	€170

深圳の世界がん会議に参加しよう！

UICC日本委員会では、隣国中国での世界がん会議になるべく多くの方々が日本から参加するように呼びかけている。抄録受付は2009年12月30日～2010年1月28日の期間。登録料は上記のようであるが、**UICCメンバー組織からの登録は、2名まで50%以上の割引がある。**宿泊施設は3000確保してあり、23,000-12,000円、12,000-10,000円および9,700-3,000円の3クラスがある。

UICC日本委員会が参加費補助

UICC日本委員会では、日本のメンバー組織に属し、抄録を出した方に、原則として各組織1人に限り、参加費の補助(15万円)を行う。補助を受ける希望者は、抄録のコピーに組織の責任者(長でなくても可)の簡単な推薦状を添えて事務局に申し込む。枠は10人なので、希望者が多い場合は、選考の上決定される。

UICC日本委員会が世界がん会議への開発途上国からの参加者を支援

昨年度、円高のためUICCへの送金が300万円ほど少なくてすんだ。この金額を、深圳の世界がん会議における、開発途上国からの参加者支援およびSessionsの開催費支援を目的としてUICCに寄付する案が、2009年7月の日本委員会総会で可決された。今回David Hill会長が、アジア太平洋がん会議で来日した機にこの決定を伝えたところ、会長は大変よろこんで、直ちにこのことを12月2日の理事会に報告した。他の組織の範になると期待したのである。

この寄付には，UICC-ARO成立に際しジュネーブと交わした覚書 (MOU) の一項目“アジアにおける世界がん会議にアジアの人々の参加を促進する為の資金獲得に努める“の実行という意味も含まれている。

特別寄稿

Denoix教授とTMN分類

名古屋大学名誉教授
愛知県がんセンター名誉総長
青木国雄

TM分類の事始め

1935年5月4日、パリで開催された初めてのUICC国際がん会議には世界43カ国の代表が参加し、理事長にMJGodart教授、また事務局長にJ Bandaline教授を選出、学会の開催時期、機関紙の発行のほか、以下の問題が早急に解決されることを要望した。

1. 腫瘍の頻度分布（統計）の標準化の方法、
2. 腫瘍の分類と病期の区分、
3. 腫瘍の発生率の国際的な比較統計法

これを受けて、米国のDorn博士は、1936年から米国のいくつかの州で継続的ながん患者実態調査から発生率を推計、最初の地域がん登録を確立した。

フランスでは1943年から1952年の間、パリのPierre Denoix教授（Institute Gustave Roussy）を中心にがん患者の診断や、病期、進展度について

研究、1958年に分類 法を提案した。

UICCは1950年、腫瘍の命名と統計委員会（委員長 I. Perry, USA）を発足させ、WHOのがん症例登録とがん統計部門の示唆をもとに、臨床病期分類と転移の定義を論議した。1953年、コペンハーゲンでの委員会では、国際放射線学会の癌病期分類と癌治療効果判定委員会と合同して協議し、翌1954年、新たにUICCがん臨床病期分類と統計への応用委員会として再編成され、委員長にはP. Denoix教授が就任した。多くの部位の癌の「がん病期分類」がまとめられ、小冊子を発行した。分類は年々改訂され、1967年までに9冊発行された。1966年にDenoix教授は引退、M Harmer教授（英国）が引き継ぎ、TMN委員会と改称し改訂が続けられ、我が国も委員を派遣している。

なお、癌患者や死亡統計の国際比較は我が国の瀬木三雄教授により、標準人口を1960年の世界人口を用いるというアイデイアで解決されたのは周知である。

日本のUICC疫学・予防プログラムへの登場

筆者は1985年から平山健先生のあとを継いで、UICCの疫学・予防部門のプログラム委員長に就任し、TMN委員会の活動を目の当たりにしていた。しかし、発案者で初代委員長Denoix先生のことは知らなかった。以前、瀬木三雄先生は、宮城がん登録についてDenoix先生から高い評価を受け、これは世界で3番目といわれ、大変感激したと、繰り返し話をされたのでお名前はうっすらと記憶していた。筆者はDoll先生編集の癌登録書の分担執筆の中で、このがん登録確立3番目という話を引用したところ、がん登録の大御所、デンマークのClemmsen教授から、3番目ではないと疑問符入りで返事があり、恐縮した。早速調べると、米国、デンマークについで英国など、いくつかの小都市が実施していたことが分かった。地域の大きさ、登録の完成度も比較せず、注釈もなく記載したのは軽率であったと反省している。

パリ行きの列車でお会いしたDenoix先生

1986年だったと記憶するが、筆者はジュネーブでの会議の帰途、リヨンのIARC（国際癌研究機構）を訪問した。UICCの仕事の件や、1981年、

デノワ先生
（UICCの委員の頃
1970年代）

名古屋で開催した「第1回開発途上国におけるがん予防会議」でお世話になった諸先生にお礼もかねてであった。その帰途、珍しくリヨンからパリまで鉄道を利用した。列車に乗り、席に着くとまもなく、隣に座っていた、恰幅のよい、柔和で知的な老紳士から、日本の方ですか、私は日本を訪問したことがあり、大変いい印象であったといわれ、うれしかった。その内容をお聞きする前に、リヨンには何の用でと聞かれた。ジュネーブでのUICCプログラム委員会やIARCの訪問の目的を答えたところ、にっこりされ、私も昔はUICCの委員をしていたので懐かしい。ところで「どういうプログラム」を企画しているのかと問われた。それで、「Evaluating Effectiveness of Primary Prevention of Cancer」プログラムがIARCの要請で共同研究になったこと、「アジア人によるアジアのがん予防研究の推進」、最近の「世界のがん死亡統計」の編集（瀬木教授の仕事の継続）などをお話申し上げた。「面白いですね、うまく行くことを念じております」といわれ、パリの近くで下車された、その時、デノワですといわれたのが記憶に残っている。この紳士が「TMNのデノワ先生」と気づくのは数年後である。Denoix先生は極めて控えめに話しをされたので、国際的な大学者と全く気づかなかった。後年、Denoix先生が欧州がん臨床の指導者であったこと、謙虚で人から慕われた国手と伺い、無知とはいえ、折角の貴重な機会を充分活かせなかったことを後悔した。同時に、国際的リーダーとは、実力もさることながら、懐が深い謙虚さが基本だなと痛感した次第である。

UICCアジア

アジア太平洋がん会議をおえて

第20回アジア太平洋癌学会会長
赤座英之

33カ国より500人が参加

第20回アジア太平洋がん会議（APCC）は、2009年11月11-14日につくば国際会議場にて開催された。世界的金融危機と円高の影響で、アジア諸国から参加者を得ることが難しい状況にあったが、最終的に外国より32カ国300人、国内より200人の参加者を迎え盛会となった。

WG（ワーキング・グループ）方式を推進

私が発案して、1年以上前から組織委員会をつくり準備を進めてきた。アジアの癌に特徴的な問題をフォーカスするため、膀胱がん、腎がん子宮頸がん、肝がん、胃がん、前立腺がん、大腸癌、乳がん、肺がん、疫学、がん登録、医薬品開発のWGを組織した。エキスパートの先生方による各WGでは、それぞれのトピックについてアジアと西欧の疫学的なバックグラウンドを対比させ、根底にあるものを浮かび上がらせることを目指し、そこから今後の対策や、臨床試験の方法などについて会議までの準備期間中に議論を重ねていただいた。第1日目に各グループでのミーティングを個別に開催し、第2日目、3日目に、Working Reportをプレナリーセッションとして参加者全員の前で発表していただいた。今後のアジアの癌対策につなげていくために出版することを目指し、現在その内容をまとめている。またClosing Sessionにおいては、APCCの方向性として筑波宣言を提言としてとりまとめた。

APCCとUICCの連携を深める

APCCは以前からUICCと関連の深いものであり、私も、UICC-AROのメンバーとして、開催の精神的バックボーンをUICCの理念において行いたいと考えた。そこで、UICC-AROのマルコムムーア氏にVice Presidentを依頼、UICC国内委員会の北川知行先生、河原ノリエ氏、増井徹氏にも助言をいただいて準備を進めてきた。また会議には、UICC会長のDavid Hill博士には3日間通して参加していただき、講演もしていただいた。また今回の目玉としては、「Culture and Cancer」というセッションを設け、UICC日本委員会の垣添忠生先生にも非常に興味深いご講演をいただいた。会場には中国や日本のUICCブースを設営して、会議全体としてもUICCへの理解を促進するプログラムになったと思う。

APCCの可能性を広げる

これまでのAPCCの会議は、会議開催でアジアの研究者の交流を深めるということに主眼をおかれていたが、今回は、明確な目標を設定して、アジアそして世界のがん医療の底上げにつながるアウトプットの創出を目指し、アジアという大きな可能性をもつ地域のAPCCが果たす新たな役割を押し広げたと思っている。次回のAPCCは2011年11月10-12日、Malaysia のKuala Lumpurで行われるため、次の開催地にバトンを渡すまで、第20回の会長としての責務において、この会の成果を各国の政策立案者、学会、医薬品開発へ反映させるべく、世界にむけて発信していきたいと考えている。

Declaration of the 20th APCC in Tsukuba 2009

- Cancer is expected to become a more serious problem in all Asian-Pacific countries, yet it has not attracted sufficient global attention.
- The previous APCCs have provided a podium for presentation of technical papers from various Asian-Pacific countries, promoted cancer science mainly in the form of epidemiological studies, and established good relationships and friendships among researchers.
- Unevenness of wealth around the world affects access to the benefits from advances in cancer diagnosis and treatment.
- The next step for the APCC is to achieve visible improvements in cancer medicine, equally in all Asian-Pacific countries.
- APCC supports and try to realize the UICC policy for Cancer Control world-wide.

The 20th APCC declares the start of the new step for the cancer control in Asia- Pacific countries.

UICC-AROの会 開催さる

APCCの機会を利用してUICC-AROの会合が朝食時を利用して開催された。会議にはAROのRegional Managing Committeeのメンバーが出席しているので良い機会であった。中国のDr. XC Hao, 韓国のDr. JK Rho (KY Yooの代り)、Dr. Hill (Cary Adamsの代り)らが、日本のメンバー7人と共に参加した。

北川委員長より、AROの地域代表としての正当性、UICCの規約や管理体制との整合性、ミッションや義務等に関し2年間に亘る論争の末、2008年12月に、ようやくMOUを作成し、それに基いてUICC-AROが正式に発足した経緯が説明された。

その後Moore Head が2008年の活動報告と2009年度の活動計画を説明、了承を得た。APJCPの発行に関しDr. Moore がほとんど一人でがんばっており、レフェリーなどを分担する方向が考えられるが、レベルの高くない内容でも、まとめ方と英語を指導して、アジア発の論文にすることを支援することに意味を見いだす人（Moore）と他のひと達との間にギャップが生じたためにDr. Mooreが一人で編集している現状が理解された。しかし今後の検討が必要である。Dr. Rhoから、韓国からも出版費用を多少支援できるとの申し出があった。

予告

2010年のUICC日本委員会総会は7月25日（土）12:00－14:30に経団連会館で行います。

がんをグローバルなアジェンダに

アジアがんフォーラム開催報告

河 原 ノリエ
アジアがんフォーラム主宰
UICC国内委員会広報委員
東京大学先端科学技術研究センター

What should we do to raise awareness on the issue of cancer in the global health agenda?

この問いをもとに、11月12日APCCにて、David　Hill博士や、尾身茂先生、武見敬三先生らを交えて、第5回アジアがんフォーラムを開催した。アジアがんフォーラムは、APCC開催準備を兼ねて、2008年6月より、アジアがん医療連携論を議論してきた会である。ゆるやかなネットワークであることもあり、多くの賛同してくださる方によって支えていただいて、ユニークな活動形態をとっている。http://www.asiacancerforum.org/

これまで、我々は、がんの途上国の現状と今後の予測について、グローバルヘルスコミュニティーでの課題共有を図るにはどうすればいいか。具体的には国連のMillennium Development Goalsの2015年の改訂作業に焦点を当てて議論を重ねてきた。これは、グローバルヘルスアジェンダがどのようなメカニズムできまるのかという、がんの政策提言活動の深層に潜む問題点の洗い出しにもつながっている。Public Private Partnershipという言葉がお題目のように昨今叫ばれているが、そう単純なものではなく、国際社会の中のプレヤーの思惑も絡み、政策提言活動は複雑な要素がからんでいる。それらを踏まえ、

3時間のラウンドミィーテイングの中では、有意義な意見が多く出ており、今回ジュネーブの会議が重なり、ビデオレターでの参加になってしまったWHOのAlwan博士にも、意見をうかがったうえで、まとめの提言書を現在、作成中である。

また、APCC開催中には、南京にひきつづき、資生堂とカゴメにご協力いただき、「アジアの女性とこどもを守る」をテーマにブースを設営して、中国におけるこどもからがん予防活動の報告と、がん患者さんのお化粧支援の紹介をさせていただいた。文化的な多様性の中にあっても、がんという病にまつわる問題を乗り越えるための智慧を分かち合いたいと思う。アジアという大きな医療格差社会においても、共有できるものをみつけようとするPASSIONが、混迷の時代を切り抜けていく手立てになっていくような気がする。

UICC日本

2009年度
UICC日本委員会総会行われる

去る7月25日、2009年度のUICC日本委員会総会が東商ホールで、22メンバー代表と7専門委員その他の出席のもとに開催された。まず北川委員長より一般報告として、今世紀に入ってからの大きなUICCポリシー変遷につき説明があった。すなわち、国連式の国別投票権と分担金が廃止されメンバー組織単位になったこと、また運動の力点が、基礎研究支援からは離れ、がんの予防と患者支援に移されたこと等である。

次にフェローシップ委員会（野田）、TNM委員会（浅村）、世界対がんデー（望月）、UICCアジア支局（Moore）、アジア対がん機構とアジア太平洋がん会議（田島）、日本における世界対がんデーの実行（北川），日本対がん協会の活動（垣添）等に関し各委員から報告がなされた。2008年度の収支決算報告（武藤）は異議なく承認された。2008-2009年の活動方針に入り、日本癌学会でのUICC国際シンポジウムとUICCブース（Moore, 北川）、第20回アジア太平洋がん会議-つ

くば（河原）、2010年世界対がんデーシンポジウム（荒田）等の活動計画が説明され、収支予算案と共に承認を受けた。来年8月深圳で行われる世界がん会議には、UICC日本委員会からUICCに、アジアの開発途上国からの参加を支援する目的で300ドルを拠出する事が決められた。また2010年のUICCの理事の改選には、日本からは田島先生を推薦する事等が決められた。

日本癌学会の UICC国際シンポジウム "子宮頸がんの征圧をめざして"

2009年度の日本癌学会の第3日、横浜パシフィコの会場で、UICC国際シンポジウム“子宮頸がんの征圧をめざして：HPVワクチンによる挑戦”が開催された。本年2月の世界対がんデーにつづくUICC日本委員会によるキャンペーンの第二弾である。

司会は吉川裕之筑波大教授とMalcolm Moore UICC-Asia Regional Office Head

演者は：

1. HPV感染と子宮がんのdisease burden
   今野　良　自治医大教授

2009日本癌学会でのUICCパネル
日本癌学会のご好意で、会場内に日本癌学会、アメリカ癌学会と並んでUICCのパネルが置かれた。"I love my smoke-free childhood"の日本語版パンフレットとUICC日本委員会ニュースレターもこの場で配布された。

2. Public health issues in introducing HPV vaccination
   Catherine Sauvaget　IARC研究員
3. The fight against cervical cancer: progress and challenges on HPV vaccination
   Soo Young Hur　Seoul St. Mary's Hospital, Catholic University 教授)
4. HPVワクチン接種の費用対効果
   福田　敬　東大准教授
5. 次世代HPVワクチンの開発
   神田忠仁　国立感染研部長
6. World Cancer Declaration and the Cervical Cancer Initiative of UICC
   Malcolm Moore博士

今野博士は子宮頸がんの実態を、Sauvaget博士はワクチン導入の世界の状況を、またHur博士は子宮頸がん征圧の韓国の努力をそれぞれ判り易く紹介した。福田博士はワクチンの無料集団接種が費用対効果を計算すると十分社会的利益をもたらすことを、神田博士は、第二世代のHPVワクチン開発に関するオリジナルで有望な研究成果を報告した。Moore博士は、開発途上国では、ワクチンはその高額と実施設備のないことから、当分は使用出来ず、結局単純な局所検査と即刻の凍結治療が予防として最も効果がある現状を忘れてはならないと締めくくった。

参加者は外国人を交えた50余人で、熱心な質疑応答があり、実りのある会であった。

ホームページ新しくなる

UICC日本委員会のホームページが新しくなりました。ニュースレターもぜんぶ収録されます。またUICC-AROの情報も盛り込みました。APJCPのミニ抄録も掲載されています。
(www.jfcr.or.jp/uicc)

新メンバーと新賛助会委員

このたび日本婦人科腫瘍学会がUICCのFull Memberになり、自動的にUICC日本委員会の会員になりました。またグラクソ・スミスクライン株式会社（日本）が、UICC日本委員会の賛助会員になって下さいました。

2010世界対がんデーシンポジウムに参加を !!

World Cancer Day

UICC世界対がんデー公開シンポジウム

〝がん予防は子どもから〟

2月4日は「世界対がんデー」です。
国際対がん連合（UICC）は毎年、世界中の対がん組織と連携し、キャンペーンを展開しています。私たちはUICCの動きに呼応して、「がん予防は子どもから」をテーマに、シンポジウムを持つことにしました。

参加無料

日時：2010年2月4日（木）
午後2時～5時

会場：がん研究振興財団・国際研究交流会館ホール
（国立がんセンター内、東京都中央区築地5-1-1）

講　演

- 感染症とがん ── ワクチンで予防する子宮頸がんと肝がん　田中英夫（愛知県がんセンター）
- タバコとがん ── 子どもの未来の健康を守れ　中村正和（大阪府立健康科学センター）
- 子どもの生活習慣とがん予防　原田正平（国立成育医療センター）
- 日本の学校教育にみる、がん予防　衞藤　隆（東京大学）
- 世界の学校教育にみる、がん予防　鬼頭英明（兵庫教育大学）
- 子どもが親を変える ── スリランカ10年の経験から　小林　博（札幌がんセミナー）

パネルディスカッション

- 何故、がん予防は子どもからか？　座長：北川知行（UICC日本委員会、癌研究所）
  別所文雄（杏林大学）

【主催】国際対がん連合（UICC）日本委員会　【共催】財団法人 日本対がん協会
【後援】日本癌学会　日本癌治療学会　日本小児科学会　日本小児科医会
日本小児保健協会　日本学校保健会　厚生労働省（予定）　文部科学省（予定）

「国際貢献と一次予防重視の視点が必要」
北川委員長ががん征圧全国大会で講演

日本対がん協会常務理事
荒 田 茂 夫

国際対がん連合（UICC、本部・ジュネーブ）日本委員会の北川知行委員長が9月10日、和歌山市で開かれた「がん征圧全国大会」（日本対がん協会主催）で、特別講演を行った。テーマは、「世界の対がん運動―UICCの活動―」で、日本対がん協会各支部の支部長ら対がん運動・検診団体の責任者、地元の専門家、行政の担当者など、約150人が熱心に聴講した。この特別講演は、対がん運動の担い手に、「世界の流れ」を理解してもらおうと、垣添忠生・日本対がん協会会長の意向で実現した。

北川委員長は、まず、UICCの組織や活動を紹介し、かつての「がん研究発表の場」から、近年、対がん運動キャンペーンや患者支援に活動の重点が移っている、と指摘。2003年の「たばこ規制枠組み条約」の採択に中心的な役割を果たしたほか、2008年、UICCが組織した世界がんサミットで、「世界対がん宣言」が採択されたことなどを紹介した。同宣言は、世界規模で、タバコの消費、肥満、アルコールの摂取を大幅に減らすことや、子宮頸がんの予防ワクチンを（10歳代の若い世代に）全員接種する計画の実施などを提言している。

UICC日本委員会が担う役割についても言及。「UICC山際―吉田国際がん研究フェローシップ」の提供や、UICCの呼び掛けに呼応し、毎年、2月4日の世界対がんデー（World Cancer Day）に、公開シンポジウムを開いていることなどを紹介した。同シンポは、2009年のテーマが、「子宮頸がん征圧を目指して」、2010年は、「がん予防は子どもから」を予定している。日本委員会は、UICCアジア支局（ARO）の創設、運営にあたっても、中心的な役割を果たしている。

北川委員長は、まとめとして、「日本の対がん運動の強化すべき方向」について、一次予防の重視や、「国際化」を提言した。

日本の対がん運動について、「最近、患者支援の活動は活発になってきた」と評価する一方、「活動はまだ、二次予防が中心になっている。UICCの視点からすると、もっと、タバコ対策や、予防ワクチンの接種といった一次予防を重視してほしい。また、国内に目が向きがちだが、国際連携、国際貢献の姿勢も重要だ。募金活動などで途上国のがん予防に貢献してほしいし、世界的なキャンペーンにも参加してほしい」と強調。最後に、こうした提言への取り組みについて、「存在感があり、信頼される日本を創るために必要な努力だと思う」と締めくくった。

日本社会が近年、内向き志向を強めているだけに、世界を視野に入れた北川委員長の講演は、聴講者に大きな「刺激」を与えたといえる。

UICC日本委員会の委員と役割分担

委員長		北川　知行
幹　事	総　務	田島　和雄
	学　術	垣添　忠生
	財　務	武藤徹一郎
	UICC	北川　知行
監　事		高木　敬三、加藤　治文
専門委員会		
	疫学予防委員会	浜島　信之
	喫煙対策委員会	望月友美子
	患者支援委員会	笹子三津留
	TNM委員会	浅村　　尚
	広報委員会	河原ノリエ
	対がん協会	荒田　茂夫
UICC本部		
	理　事	北川　知行
	Task force委員	田島　和雄、望月友美子
	Fellowship 委員	野田　哲生
	TNM 委員	浅村　　尚
アジア・太平洋癌学会(APFOCC)		
	Secretary General	田島　和雄
アジア・太平洋がん予防機関(APOCP)		
	Secretary General	K-Y Yoo
UICC-Asia Regional Office(ARO)		
	Head	Malcolm A Moore

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター	大阪成人病予防協会
(財)大阪対がん協会	大阪府立成人病センター
神奈川県立がんセンター	(財)癌研究会
(財)がん研究振興財団	(財)がん集学的治療研究財団
県立静岡がんセンター	国立がんセンター
埼玉県立がんセンター	(財)佐々木研究所
(財)札幌がんセミナー	高松宮妃癌研究基金
千葉県がんセンター	東京慈恵会医科大学
東京都立駒込病院	栃木県がんセンター
新潟県立がんセンター	日本癌学会
日本癌治療学会	(財)日本対がん協会
日本乳癌学会	日本肺癌学会
日本婦人科腫瘍学会	(財)福岡県すこやか健康事業団
北海道対がん協会	宮城県がんセンター

賛助会員
（山極－吉田国際奨学金）　協和発酵工業（株）
（がん予防活動）　アメリカンファミリー生命保険会社
グラクソ・スミスクライン株式会社

UICCホームページ： www.uicc.org
UICC日本委員会ホームページ：www.jfcr.or.jp/uicc